

## 第三十章 問天従命

臨時国会の召集は昭和五十三年九月中旬と決まり、取り上げる議題について、福田首相と大平幹事長の間で話し合いが行われていた。最大の懸案は補正予算の審議であり、その中には、春の予算修正で与野党間に成立した合意を盛り込まなければならぬ。福田周辺は、この補正予算問題で臨時国会は相当難航することを予想し、場合によっては、「冒頭解散」を行う準備もしていたという。

臨時国会は初めから与野党が強く対立した。社公民三党はいち早く一兆円減税要求をかけた、補正予算の組替え動議を衆議院予算委員会に提出する動きを見せた。そのねらいは、組替え動議を可決することではなく（仮にこれを可決する事態となれば、福田内閣に解散の口実を与えてしまう）、むしろ、自民党と新自由クラブの折衝を自分たちに有利な方向へ誘導することであった。

新自由クラブは自民党から最大限の譲歩を引き出そうとして、「自民党が要求に応じないなら組替え動議に賛成せざるをえない」との強硬策もちづつかせたが、大平幹事長と新自由クラブの西岡幹事長との折衝により合意が成立した。新自由クラブは社公民三党の組替え動議に反対に回り、政府提出の補正予算案は無修正のまま、自民、新自由クラブの賛成で成立した。最も緊張したせめぎ合いの場面は、こうして大平幹事長が巧みにしのご切った形となり、解散の可能性は、これによってほぼ完全に終息したのである。

しかし、大福間の政治休戦は予期しない政治的效果をもたらすことになった。安定した大福体制に対する評価が党内に高まるにつれて、黨員の間に、「大福体制を変える必要はない」という意見が強まり、「大福による話し合い調整」を望む黨員を増大させたのである。しかも、すでに述べたように、福田内閣の支持率が上昇しはじめていた。石油ショック後の景気不振も底をつき、ようやく明るい兆しが出だした。五月末、政治休戦に踏み切った当時と比較して、情勢は福田再選にきわめて有利に展開しはじめたのである。

八月末、予備選の有権者が締め切られると、マスコミは百五十万黨員党友の動向をさまざま工夫をこらして探ろうとした。各種の世論調査が行われたが、その結果は、福田首相の圧倒的優位を示すものばかりであった。こうした情勢の変化が、福田派首脳に、予備選をやっても勝るとの考えを強めさせ、解散強行を自重させる一つの要因となったことも否定できない。大福会談に臨む福田首相の姿勢は微妙に変化して行った。

大平幹事長は、この頃「話し合いによつて首相が下りるなんて見方は甘い」とか、「相手に瞞されてはだめだ」という親しい人々の意見にやつきとなつて反論し、時には激怒することさえあった。日頃温厚な人柄であり、たいていの悪口や冷やかしには笑つて応える大平ではあったが、よほど心に鬱屈するものがあつたのであろう。党内の情勢は誰の日にも福田優位の下での大福決戦と映つていたが、大平は、頑強に否定しようとしていた。

党内情勢の展開を心配した保利衆議院議長と大平幹事長との会談が、九月中旬、極秘裡にホテルオークラの一室で行われた。保利は党籍を離れた議長という立場上、自民党内の問題に表立つて介入するわけにはいかないが、二年前の経緯もあり、この頃は心情的にも大平と相通するものがあつたようである。これと相前後して大平は、盟友田中角栄とも東京信濃町の故池田勇人邸で会談したが、会談を終えて帰ってきた大平は、「今日は角栄に叱られてきたよ」と側近にもらした。

決戦必至の客観情勢にもかかわらず、戦闘指令を出さない大平に、大平派の幹部は焦躁の色を隠し切れなかった。宏池会の木村貢事務局長は、たまりかねて、秘書團を中心とする選挙態勢の準備を進めたが、大平は木村に、「そう無理をするなよ」と言った。木村は、それが何を意味するかはつきりとはわからなかったが、「幹事長、上の方でどんなことがあつた

か知りませんが、話し合いをするにしても、結局は、数の背景が必要です。だから、あなたは黙っていてください。私は多少勇み足をするかもしれませんが……」と言うと、大平はしばらく口をつぐんでいたあとで、「十一月になったら、様子が変わるかも知れんぞ」とポツリと言った。大平は、ここまできてもまだ福田との信義が守られることを期待していたのである。

予備選は必至の形勢となったが、大平にとって選挙情勢は急速に不利になりつつある。だからといって、大平の信条がらずれば、話し合いで譲歩し、福田で一本化することによって、禅譲を期待するというわけには行かなかった。そのような屈辱的な打算に走ることは自らに対して許せなかったのである。また、大平は宏池会のリーダーとしても、公選を自発的に下りることは許されなかった。公選が行われれば、政権の座をめざして全力で戦うことこそ宏池会の伝統なのである。それだけではない。大平はこれまで二度も政権の座へのチャンスを逸してきた。一度は田中政権末期の政変で公選論を主張して敗れ、二度目は、三木政権末期の混乱期に福田に政権を譲っている。どんなに不利でも公選に打って出て堂々と戦うほかはなかった。

この頃大平は、「総理大臣にならなくても、小村寿太郎、陸奥宗光、西郷隆盛などのように立派な仕事をして歴史に名を留めた人がいる。政治家は、何になるかが問題ではなく、何を為したかが問題なのだ」と語っている。その口調は自らの胸中にある何かを確かめているようであったが、心中、総裁公選で福田に敗北することもありうると考えていたと思われる。

進退は天に問い 栄辱は命に従う “ 大平は、人生の大きな岐路に当って、つねにこの言葉を掲げてきた。四十七年の初の総裁公選への出馬のさいにも、また、二カ月前の郷土の支持者を前にした時にもこの言葉を口にした。いままた最高権力の座を争う戦いにそなえて、『退を天に問い』その栄辱については『天命に従おう』、それが大平幹事長の心境であった。

公選の告示が行われる十一月一日を一月月後に控えた九月末から十月上旬にかけて、大平の心情や福田・大平会談の成行きとは別に、宏池会の国会議員や秘書団は、情勢の分析に全力をあげていた。盟友の田中側からは、「大平側が予備選で福田との差を百点以内に押さえてくれたら、本選挙で逆転する自信はある。しかし点差が三桁になると逆転は難しくなる」という見方がもたらされていた。

この頃、マスコミが各種の手段で調査した結果では、維持点数千五百二十五点のうち、福田は七百点から八百点、大平は四百点から五百点、中曽根は二百点から三百点、河本は百点以下というのが大勢であった。しかも、福田は上昇気運にあり、大平は下降気味、中曽根がその大平を急追しているというのが大方の観測であった。この選挙は初めてのことであり、調査の結果は十分正確とは言い難いが、それはこの時点での実勢をかなりよく示していたと考えても、おそらく間違いはないであろう。

ところで、擁する国会議員の数からすれば、大平を支持する議員は、福田陣営の倍以上である。にもかかわらず、何故、予備選では福田が大差で優位という結果が出るのか、大平陣営にとっては、それが問題であった。さまざまの調査結果を分析していた大平陣営では、次のような結論に達した。すなわち、中央のみならず地方にいたるまで有権者の多くが大福体制の成果を認めて、大福は争うべきではないと考え、現職の福田総裁への支持を表明しているのではないかということである。とすれば、大福体制を肯定したままでは予備選挙には勝てない。戦うなら、決断の時期は早い方がよい。大平は、同志たちの進言にもとづき、運命を賭けた決断を自ら下すことになった。

これに対し福田周辺は、圧倒的に有利だとは言うものの、時日が切迫してきているのに、一向に予備選の運動指令を出さない福田にやきもきしていた。『予備選までには、話合いで福田に一本化するのだらう』それが側近たちの解釈であった。

予備選では、投票用紙の候補者欄に 印を記載し、これを郵送することによって投票が行われる。この投票用紙は党本部から都道府県連に一括して送られ、そこから有権者に郵送される。告示の十一月一日から有権者への郵送が始まるとすれば、投票用紙が有権者の手許に渡るのは、十一月五、六日頃であろう。投票はそれから始まり、予備選の開票が行われ

る前日の二十六日までには到着していれば有効とされた。投票期間は二十日間、その間候補者は十五回まで遊説ができることになっており、候補者の運動と投票が重なる変則的な選挙であった。

全国の党員党友の末端まで運動を浸透させるには、少なくとも一カ月はかかる。投票のピークを十一月十日頃とすれば、戦闘態勢の指令は十月の十日には出さなければならぬ。大平はこの方針を承知していたが、十日は無為のまま過ぎた。十三日になって大平は、ようやく「大福体制の終了と新政治勢力の結集」という表現ではどうだろうか」という反応を見せた。要するに、大平としては、こちらから決戦を挑むのではなく、立派に成果をあげた大福協力の体制の第一ラウンドは終わるが、大福間の信頼関係までは切れるのではなく、公選後も形を変えて継続するということを目指したかったのである。

大平周辺はそれではなまぬるいと考えたが、大平の言い出した方向で大福体制終了宣言の内容を固め、翌十月十四日に行われる徳島の政経文化パーティーの機会に、記者会見の場でこの方針を打ち出すこととなった。

その前夜、総裁選に出馬するかどうか去就が注目されていた中曽根総務会長から、極秘裡に大平に会談したいという申し入れがあり、ホテルオークラの一室が用意された。この会談は八時過ぎから一時間二十分近くにわたって行われたが、会談後大平は、「中曽根君は大福密約と大福会談の内容について聞きたいと言っているので、ぼくは『密約はないんだ……』と答え、会談の経緯について率直に説明した……」と語った。

中曽根は後に「大平さんから大福会談の内容について詳しく聞きました。大平さんは、六月、八月、十月と福田さんの発言が変化して行ったことを詳細に話され、憤慨しておられました。また、予備選挙には出ざるをえないという理由も説明され、『淡々と予備選挙をやり、その後はまたキミもボクもそれぞれ政府と党に立場を占め、皆で政局を担ってほしい』と話しておられた……」と語っている。

翌十四日、徳島における記者会見に臨んだ大平はまず、「大福体制のもとで参院選を勝ち抜き、党改革も進めてきた。内政外交の懸案も着実に処理し、当面の責任を果たしてきた」とその成果を強調したあと、「大福体制は、こんどの公選で新

しい政治勢力が出来上がることによって有終の美を飾る協力体制であった」と述べて、臨時国会閉幕によって政治休戦がその役割を終えるという考えを表明したのである。

すでに、補正予算が成立した十月十二日には、鈴木善幸、斎藤邦吉、佐々木義武の三幹部が私邸で大平幹事長と協議を行い、臨戦態勢を確認するとともに、宏池会のメンバーは一齐に選挙区に帰郷して予備選の運動に取りかかることを決定していた。大平自らが行った「大福体制終了」宣言はこうした派内の動きを加速させた。

福田首相は、この大福体制終了宣言に大きな衝撃を受けたようである。大平は国会終了の翌二十一日には、立候補声明を行う日程が決まっております、それを福田首相に伝えるのは当然の礼儀であるとして、そのさいには、福田側からも何らかの意思表示があつて然るべきだとも考えていた。このギリギリの大福会談は国会終了日の二十日、参議院本会議後、福田首相の野沢の私邸で夜八時から行われた。

二人だけの一時間二十分にわたつて行われた会談で、大平はまず、立候補せざるをえない立場を述べ、「明日二十一日午前に同志が推す総会があり、私も出席してあいさつを述べるので諒承願いたい」旨を伝えた。福田首相はこの申し出を「やむをえない」と諒承したものの、自民党安定のために大福間の信頼関係がひきつづき必要であることを指摘し、結局「大福間の信頼関係は今後とも揺るぎなく、その協力の態様はその時々で変わることがあるが、信頼関係を損なわずに維持していく」ことで、両者の意見が一致した。

だが、この会談でも福田首相はついに自分の進退については触れず、自分を信用してほしいと言い、ただ二点の注文をつけたと言われる。一つは立候補者の所信を打ち出す政策についてであった。結局、両者は「具体的にみると抜きさしならない事態になりかねないので、政策や論争は考え方の方向や人柄をつかがわせる程度にとどめ、選管委に判断を求める」ということで合意した。もう一つは、二十一日午前、大平派の総会と時を同じくして開かれる田中派の総会に大平幹事長が出席し、出馬のあいさつをして協力を求めるといふ段取りを自粛してくれないかという要望であった。大平はこの点についても受け入れた。どのようなニュアンスのやり取りだったかは明らかでないが、この条件が大平の選挙運動を着しく

不利にすることは明らかであるにもかかわらず、それに同意した裏には、大平が期待を寄せるに足る何らかの言明が福田首相からあったものと推測される。

大平は、その夜、私邸につめかけた『大平番』の記者たちに、「きょうの大福会談は、二年間、大福体制でやってきたから、キチンと仁義を切ったものだ。政策論争にワクをはめたように言うが、総理・総裁を目指すものは、総裁選後の政局、党運営を配慮するのは当然で、そうなければ論争のワクはおのずと決まってくる。合意は、当り前のことを当り前として確認したまでだよ。……福田さんは自分のことは何も言わなかったが、私が（わざわざ）私邸まであいさつに行ったのだから、もし福田さんが（立候補の）決意をすれば、会談を申し入れ、私に伝えるのが礼儀と思う……」と説明している。

その頃、大平は、自分で執筆していた『所信』の文案を宏池会の関係者に示した。それは政策でもなければ、総理・総裁の座を目指す戦いの檄文でもなく、自分が総裁選に立候補せざるをえない立場や考え方の表明に過ぎぬものであった。その趣旨は、二十日の大福会談における申し合わせと全く一致していた。

会談直後、大平はもう一つの福田の要請を実行しようとしている。大平は車中で安田幹事長秘書に「総理が希望しているので、明日の田中派の総会への出席は、鈴木君に代りに行ってくれるように言ってくれないか……」と命じた。しかし、田中派が催してくれる最大のイベントへの不参加は、秘書から伝えて済むようなものではない。それでは多大の協力を求めねばならない田中派の支援を熱の入らないものとしてしまうであろう。大平は、その夜院内の平河クラブでの記者会見後、宏池会の事務所で大福会談の成行きを独り待っていた鈴木善幸とこの問題について話し合うこととなった。日頃温厚な鈴木もこの時ばかりは声を荒らげ、大平にむかって「まだそんなことを言っているのか。田中派の総会には絶対に出なければだめだ……」と強硬に代理出席を断つたので、大平もこれを認めざるをえなくなった。その深夜、大平は自ら福田首相の私邸に電話し、「田中派の総会に出ざるをえない」ことの諒解を求めた。

こうして、大平、福田の両陣営は、両首脳の思惑をよそに決戦に向けて走り始めた。亀裂から対決へ――一旦、戦いが始まれば、大平が期待するように静かに競い合うわけには行くはずがなかった。にもかかわらず、この日午前、ホテルオ

「クラにおける総会で、総裁公選擁立の決議を受けたあとの大平は、記者会見で、ことさら氣勢をそらすような答弁に終始したのである。」

「公選に臨む抱負は？」

「この公選は党再生の第一歩だ。したがってこの公選を通じ、権威あるリーダーシップを確立していくことである。それにふさわしい選挙戦を展開せねばならないと思う。しかし、党内のことだからおのずと限界があることも承知している。党の結束を守り、基本的信頼関係を維持し、政策のフレームの中で、自らの政策を最大限に示して理解を求めて行く。」

「福田氏との争いになるのか？」

「争いという言葉のニュアンスだが、リーダーは一人だ。何人もいるわけではない。それをどう選択するか、が有権者の判断だ。素直に判断をゆだねることではいいのではないか。争うというよりむしろ、そうした有権者の評価を競うということではないか。そういう信頼関係には何らの影響もない。あつてはならない。」

「福田氏との違いは？」

「福田さんにチャレンジするのではなく、自民党のリーダーシップにチャレンジしている。任期満了だから候補者は平等のスタートラインに立っている。福田さんにチャレンジするとは受けとっていない。個性はそれぞれ違う。違いを言えと言ってもむづかしい。皆さんの方がよく知っている。福田さんがもし立ったらフェアに争い、個性をはっきりさせて然るべきだ。それをフェアに有権者に判断してもらおう。」

前日の福田の要請にあまりにも忠実な大平発言であった。

一方、大平幹事長から出馬の意志を示された福田首相は、事の成行きに困惑したらしい。福田は、翌二十一日、世田谷区野沢の私邸に腹心の塩川正十郎を呼び、次のように言った。

「やあ、大平君がきてね、（公選を）やらざるをえなくなった。すっかり構えてしまっているんだ。よわった。」

塩川によれば、「それでも福田さんは公選に対する指示を何も与えなかった」という。

それから三日たった十月二十四日の朝、瀬田の太平邸に一本の電話がかかってきた。お手伝いさんが出てみると、福田首相からである。新聞記者に囲まれて雑談していた大平がちょっと顔色を変えて、電話に出た。

この時、その場にいた記者は数人。そのメモを総合すると、大平は、次のような受けこたえをした。

「……」

「そうですか」

「……」

「任務がおりになるといっんですな」

「……」

「やむをえない。こうなった以上はフェアにフランクにやりましょう」

「……」

「いや、こだわらずに」

短い、一分もかからない電話を終わって、大平は椅子に坐った。顔色が青ざめていた。

記者が「誰からの電話ですか」と聞いても、大平は返事をせず、少して、「自分にはどうしてもふっ切れないシャイな弱さがあるけれども、吉田（茂）さんの妥協しない強さには惹かれるんだ」と、記者たちにとっては謎めいた言葉を残し、そそくさと立って奥に入った。その日から総裁公選が終わるまで、大平邸の居間には、吉田茂の「善者不弁 弁者不善」という色紙の額が掲げられた。

二日後、福田は人を介して、「大平君に大変すまないことをした。是非、会って話したい」と会談を申し入れてきた。しかし、大平は「いまさらばくが福田さんと会う必要があるのか……」と不快感をみなぎらせるだけだった。

だが、会談を拒否した大平幹事長には、今までのようなためらいはなかった。天に問った答は全力をあげて戦えということである。こうして大福間に残された最後の一本の細いカスガイもはずされたのである。